

「学生自主活動報告会」

MG生による自主活動プロジェクトの一年間…

昨年度に引き続き、一月二十九日(火)に学生自主活動の報告会と交流会を行いました。学生と教職員、計五十二名が参加しました。

【自主活動報告会云】

今年度はプロジェクト型自主活動に加え、学芸員課程の学生グループも参加し、学生達の幅広い活動の一環を垣間見ることができました。さなぎプロジェクトの十団体と君の歌プロジェクトの代表者がパワーポイントを使用し、活動の成果や課題などについて発表しました。

学芸員課程の学生は、被災資料のレスキューや仮設住宅の方々を仙台市博物館に招待して案内する活動を行っており、学芸員の卵として実践的な経験を積んでいるようでした。「昨年は震災関係の活動が多かったが、今年は学校関係の活動が多いと感じた。復興が進んでも支援を必要としているところはある」と継続的な支援について考えていました。

◆報告会参加プロジェクト(団体)一覧◆

学芸員課程有志

学芸員課程

被災地の資料保存・修復などを中心に活動

プロジェクト型自主活動

君の歌プロジェクト

音楽科学生作「君の歌」と音楽の力を広める

さなぎプロジェクト

- ①国際支援活動 Triangle
- ②楽食プロジェクト
- ③おいしい放課後
- ④MGPR
- ⑤Heartful Sweets
- ⑥harapeco ばくばく
- ⑦Internatio なる!?
- ⑧Café Parterre
- ⑨本の森プロジェクト
- ⑩エコプロジェクト CHERISH

(活動内容は春夏号で紹介済みのため省略)

報告会に参加した学生達は、他のプロジェクトの発表に、真剣に耳を傾け、様々な可能性を探しました。「今まで他の団体の活動を知る機会が少なかったので、色々知る事が出来て、刺激を受けた」「他のプロジェクトの工夫を知る事ができ、参考になった」と言う声も上がっています。



これまで学内中心に活動していた団体からは、「学内に限らず、他の団体とコラボレーションして外に出てみるのも良いと思えた」と新たな方向性を見出していました。

【交流会云】

各団体の抱える悩みには共通のものが多く、一番のネックになっているのは広報でした。自分達の活動や企画を思うようにアピールできない、参加メンバーを集めることに苦労している、との話に、他のプロジェクトメンバーから「私たちも同じです」という声が多く上がっていました。

先生達からは「人を集めるには自分たちの活動に価値を付けて伝える事が重要」「フェイス・トゥ・フェイスでコミュニケーションをとる事でも広がる」とのアドバイスがありました。今後の活動の方針も含め、それぞれが一つ上の段階を目指しながら続けていく予定です。来年度のさなぎプロジェクトへの応募を決めている団体もあり、学生達はやる気に満ち満ちていました。



八月から継続的に支援活動を行っている石巻市立大原小学校。通常の学習支援以外にも後期はお弁当箱法や音楽会を企画し、各学科の専門性を活かした総合的な支援を行いました。小学校からは「長期間にわたり、子ども達と接してもらい、学生さん達には準職員並に活躍してもらっています。教員を目指している学生さんはきつと子ども達に慕われる良い先生になると思います」とのお言葉を頂きました。

【お弁当箱法】

震災後、仮設住宅からのバス通学により運動不足気味の子どものために、お弁当箱法を使って栄養バランスと、自分に見合った食事を身につけてもらう講習会を十二月十四日(金)に行いました。



お弁当箱法を学んだ食品栄養学科の学生達は、栄養面と子ども達の好みを考えてながら、何度もメニューの試作を行い、準備を進めてきました。当日は、お弁当箱法のポイントについて学生がクイズも交えて分かりやすく説明した後、

自分たちの年齢に合ったサイズのお弁当箱におかずを詰めていきました。おかずは五、六年生と学生が調理し、自分たちが作ったおかずを全員でいただく楽しみも入ったようです。

今回使用したお弁当箱は、子ども達に今後も普段の食事や外食で栄養バランスなどを考えてもらうために、持ち帰ってもらいました。「あの後もお弁当箱を使っているよ」という声もあり、子ども達は食に関する知識と興味を得たようです。

後日、出来上がった自分のお弁当写真を貼り付けた修了証書を、一人一人の子ども達に渡しました。

【音楽会】

二月二十一日(木)は音楽科の菊池蒸江先生と学生による弦楽四重奏と、音楽科有志による合唱の演奏会を行いました。食品栄養学科と児童教育学科の有志がおやつを作り、体育館に集まった児童と先生達に楽しんで頂きました。



弦楽用に編曲した曲や、耳慣れた有名なクラシック音楽を、菊池先生が一曲ずつ丁寧に説明して下さい、ハイドンの「セレナーデ」やホルストの「ジューピター」、ドヴォルザークの「新世界より第三楽章」など、日常生活やテレビなどでも使われている曲は、小学生達も分かった瞬間に目を輝かせていました。本格的な弦楽演奏に、子ども達はおかしを食べることも忘れて、圧倒されたように聞き入っていました。



音楽科の学生有志による合唱では合唱コンクールなど定番の曲や、石巻出身の音楽科学生が作った曲を歌い、ジブリやジャニーズの曲など、子ども達好みの曲も数多く盛り込まれていました。最後には、大原小学校の先生がピアノと指揮で加わり、大学生と子ども達と一緒に踊りながら歌う楽しい一時を過ごしました。

弦楽演奏を行った音楽科二年生の佐藤愛美さんは「子ども達が真剣に聞いてくれた事が嬉しかった。今回の演奏会にあたって、菊池先生から外で演奏するためのノウハウを教えて頂き、良い経験になった。小学校の先生から、クラシック演奏を目の前で聞く機会がなかなか無い、と伺い、今後もうこうして外での演奏活動の経験を積みたい」と話してくれました。

りんごプロジェクト

「りんごはどっちがあたまたま?」「りんごの香りは紫色」「りんごの種はなみだの形」これはりんごプロジェクトに参加した亘理・荒浜の保育所の五歳児達の言葉です。りんごプロジェクトは被災した地域を再発見する事と、プロジェクト型の保育を実現する事を目的に、保育所の保育士、本学学生・院生・教員が立ち上げました。

亘理特産のりんごをテーマに五感を使つてりんごにふれ、「はてな?」を探します。実際にりんご園へ行き、自ら収穫したりんごを観察。臨床美術の手法で描いた一つ一つのりんごを集めて、私達のりんごの木(オブジェ)を創りました。亘理のりんごの品種「新世界」にちなんで「新世界」を演奏する音楽会も行われ、五歳児の活動を見ていた四歳児は「来年は私たちの番よね?」と来年を待ちきれない様子でした。今後は、保育士と本年度の活動を振り返り、プロジェクトを継承、発展させたいと考えています。

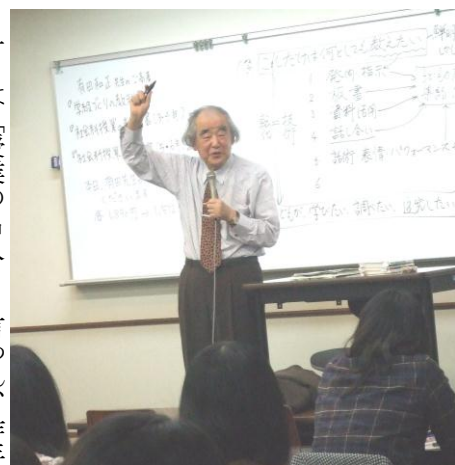


ワークショップ開催!

MG・LACでは十二月と一月にワークショップを開催しました。一回目は、十二月六日、七日の二日間、吉井千周先生の「ことばをつむぐ、ことばでつなぐ」をテーマにワークショップを行いました。参加学生は延べ二十二名。二日目のワークショップの最中に大きめの余震が来るハプニングもありましたが、学生達は動じること無く真剣にワークに取り組んでいました。



参加者の一人、食品栄養学科一年の藤原望さんは「いかに上手に伝えるか、言葉選びの重要性を考えたり、コンセプトを明確にするためのマインドマップの作成など、非常に参考になった。アメリカのオバマ大統領の勝利演説の中にマインドマップの手法が使われていると知り、利点を再確認できた。いかに自分に注意を向けられるかが言葉の伝え目的を果たすための第一歩だと学んだ」とことばを活かす術を学んだようです。



一月は「授業の名人」と言われ、昨年度二〇一一年サマーカレッジの講師を務めて下さった有田和正先生をお招きしました。前半はカリキュラムデザイン、学級づくりについての講演。後半は自主活動「りんごプロジェクト」の活動報告とその講評を頂いたワークショップです。

ユーモア溢れるお話に、参加した学生達は時折声を上げて笑いながら熱心にメモを取っていました。子どもに興味を引くために必要な事、有田先生が心がけている事など自らの体験談や教師となった教え子たちの体験談を通して教えて下さいました。

りんごプロジェクトの学生へは「実際に木になっっている様子を確かできるのも良いね」と、学生の取り組みを労いつつ、子ども達が「はてな?」を探するためのアドバイスを頂きました。約三時間のワークでしたが、まだ話を聞きたいとの声が多く、少しでも多くの事を吸収しようとする意欲的な学生達に、有田先生も時間ギリギリまで応えて下さいました。

一月二十七日(日)、さなぎプロジェクト「Internationalなる!!」が主体となり、キズナ強化プロジェクト(以下キズナP)の南アジア八ヶ国六九名の青少年を受け入れました。

キズナPは国際社会へ震災に関する正しい情報発信と、被災地への復興支援、被災復興経験の共有など海外との絆強化を目的とした国のプロジェクトです。今回の訪問団は石巻、相馬、亘理をめぐり最終日が本学学生との震災体験談交流会でした。

中には、国際文化学科が今年度のインド実習の際に交流した方も来訪しており、思いがけない再会を喜び合いました。当日は、東北訪問最終日ということもあり、それぞれ民族衣装を身にまとい、本学へ。煌びやかな衣装や珍しい文様の衣装に学生達も釘付けでした。交流言語は主に英語でしたが、日本語学習者も多く、積極的に話しかけていました。帰国後もSNS等を利用して、学生との交流が続いています。

今後はキズナPの派遣事業として本学より十五名が採用され、児童教育学科三年の引地リサさん、丹治咲耶さんがオーストラリアで被災小学生のための取り組みであるサマーカレッジについて講演することが予定されています。

～訪問団詳細～

SAARC 8ヶ国

- アフガニスタン
- インド
- スリランカ
- ネパール
- パキスタン
- バングラデシュ
- ブータン
- モルディブ (50音順)

69名 参加

本学参加学生

29名 参加

キズナ強化プロジェクト

交流



キズナP交流プログラムで企画・進行を務めた「Internationalなる!!」代表の英文学科三年鎌田光さんは「国際交流の中でも今回はテーマが硬いため楽しさが伝わり辛い。参加する学生にも、単に海外の方と出会うだけでなく、何かを得て帰ってもらいたいし、ホストとして海外の方にも来て良かったと思ってもらいたかった」と今回の趣旨について話してくれました。テスト期間という事もあり、厳しいスケジュールの中で行われた企画でした。

「企画の規模が大きく、準備期間も短かったので大変ではあったが、乗り越えた事で何でもできるのではないかと自信がついた。ただ、一つのものをつくるのは当事者だけでは出来ないと感じた。バックアップの有無で実現できる範囲も変わるので、LACを通じていなければやっていなかったかもしれない」と頼もしくも嬉しい言葉をくれました。

「企画の規模が大きく、準備期間も短かったので大変ではあったが、乗り越えた事で何でもできるのではないかと自信がついた。ただ、一つのものをつくるのは当事者だけでは出来ないと感じた。バックアップの有無で実現できる範囲も変わるので、LACを通じていなければやっていなかったかもしれない」と頼もしくも嬉しい言葉をくれました。

2012年度 大学祭



大学祭では、プロジェクト型自主活動や災害復興ボランティアなどLACに関わる様々な活動のパネル展示と、サマーカレッジの記録上映を行いました。

大学祭一日目、君の歌プロジェクトの学生が大いに活躍しました。ピアノ池のサブステージやLACの活動報告、パネル展示会場で合唱を行い、多くの観客をその歌声で魅了しました。しかし、この日は生憎と風が強く、外での合唱は楽譜が風に飛ばされてしまうハプニングがありました。観客の方々には寒さも気にせず、美しいハーモニーを堪能していただきました。小学生の女の子からも、「良い曲だったから楽譜が欲しい」という嬉しい声もありました。君の歌プロジェクトの学生が使用している楽譜を譲り、観客とも直接交流できたようです。

パネル展示会場では、学生が自分たちの活動を来場者へ説明。学内だけでなく、地域住民や他大学の学生に、自分たちの活動をアピールする良い機会となりました。

活動報告



今年、「住友商事東日本再生ユースチャレンジ・プログラム2012」より助成を受け、被災地子ども支援を中心に活動してきました。十二月一日と二日、東京八重洲で開催された中間報告会に、住友商事より助成を受けた三十四団体が参加。本学からは、東松島・石巻で継続的に活動してきた食品栄養学科四年の伊藤真奈美さんとサマーカレッジで記録班として活躍した児童教育学科二年の引地リサさんが「宮城学院女子大生による子どもの「日常」再生ネットワーク」の活動を報告してきました。意見交換を行い、住友商事の方や他活動団体からアドバイスを頂く有意義な機会となりました。

別日、東北学院で行なわれた、復興大学災害ボランティアアステーション主催のシンポジウムでは、日本文学科二年の後藤詩織さんを加えた三名が参加しました。東北だけでなく、東京、関西、九州からも大学生が参加しており、ボランティア活動の意義や課題について意見交換し、互いに刺激を受けたようです。

南光台小学校 学習支援

震災後より続いている南光台小学校との交流はまもなく二年を迎えようとしています。学びと遊びの支援は、後期も一年生のクラスを中心に活動してきました。

後期から活動に参加した音楽科三年生の小笠原綾香さんは「子ども達と触れ合うのは楽しい。給食の時間など、見ているだけでも懐かしい」と語る一方、「先生ではなく、あくまでボランティアなので子ども達を注意しなければならぬ場面が私が出ているのか、という不安と、注意しなければ子ども達のためにならないという葛藤がある」と話してくれました。小笠原さんだけではなく活動をしている他の学生も「子ども達のためにしたい、今後も関わりたい」という気持ちは同じでした。継続して支援できるようにミーティングをこまめに行いながら活動しています。

被災地支援「ハズバンド」プロジェクト

十一月から、宮城野区の仮設住宅に暮らす子ども達を対象とした音楽支援(Heart Music School)を宮城復興支援センターと協力して行っています。学生有志とウィンドオーケストラサークルの学生が、管楽器をメインに演奏指導を行っています。発達臨床学科の足立智昭先生より、被災地の子ども達の現状について事前研修を受け、活動を開始しました。子ども達は音階が吹けるまでになってきています。

その他活動・今後の活動

前期より、本学中高のシャロン寮での学習ボランティア、青葉区中央市民センターでの日本語学習ボランティアなど、多くの活動が継続中です。また、来年度の小学生のためのサマーカレッジ実行委員会に十数名の学生が参加し、一月から準備を進めています。

昨年、六月に行った大崎の農家見学会をきっかけに、様々な自主活動で食材を活用してきました。楽食プロジェクトではジャー牛の牛乳を使ったソフトクリームや飲むヨーグルトのワゴン車販売を企画。毎行列が出来て、売り切れる好評振りでした。大学祭では食品栄養学科や国際文化学科など複数の団体が野菜や卵などを使用し、地産地消をアピールしました。大原小学校のお弁当箱法や音楽会でも、食材や飲み物として活用しました。

来年度もさなぎプロジェクトの募集が予定されており、新たなプロジェクトを計画している学生から相談や問い合わせが来ています。学生達のプロジェクトは深化し、多様な広がりを見せています。

【編集後記】

一号目を無事発行する事が出来ました。この季報が、学生達の活動の様子を少しでも知って頂く一助になれば幸いです。来年度も学生達の幅広く活発な活動を記事に出来る事を期待しています。

(M・G・L・A・C)